
オン ≠ ヨウ少女

水城みゆか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オン≠ヨウ少女

【Nコード】

N3892N

【作者名】

水城みゆか

【あらすじ】

特異霊媒体質の五十鈴、それを扶助する昴。二人は穏和な学園生活にするためオカルト研究会を立ち上げようとする男の問題行動を監視すべく潜入する。

くきく

日も沈みきつた夜……。とある教室に人集りができている。

そこは名のある名門校『陽院蘭学園』の一室だった。全校生徒数はよりすぐりの700名。

華族と呼ばれた者たちの末裔や大手企業の令嬢令息たちが集うことで、この夏の終わりにとある会が流行ってきていた。

——自然科学現象研究会。

名ばかりのオカルト心靈研究会である。

「昂、おい昂」

中学生生活も終わり、受験の山場を無事に乗り切った石妙昂^{いしたえすばる}は訳あってこの研究会のイベントに参加している。

俺の横から声を掛けるのは目つきの鋭い女、三雲五十鈴^{みくもいすず}。

幼少の頃からくされ縁があって高校まで一緒になってしまった。

「私はこんなのに参加するつもりはない」

整った顔立ちに白い美肌。誰がどう見ても一目で美人と言えるが、俺は今まで五十鈴に特別な感情を抱いたことはない。

その理由は俗世を超越したような雰囲気や言動が同じ人間に感じさせないとも言っべきだろうか、とにかく五十鈴は誰よりも変わったものを持っている。

故に俺は初め彼女を先生と呼んでいたこともあった。……。

「参加しなくても見るだけだって。本当にこの研究会がやばいことしてたら五十鈴も困るだろ？」

五十鈴は簡単にいうと見える人だ。

もつというところという道に本来いるべき存在だ。

霊媒体質で過酷な日常生活で生きてきた彼女は少し変わっている。身を守るために色々な術式も会得してるし、それなりに精神力も高い。

しかし時々脆いことがあるために入学する学校にはいつも五十鈴が独自の『道連れ』いわゆる陰陽道でいうところの気の流れを変える作業を行ったりしなければならぬ。

——がらがら。

スライドした扉の向こうには男が一人視線をはせていた。

「ざっと三十人くらいか……」

深緑のＴシャツにジーパンを履いただけの男子生徒。

おもむろにそいつのことを師匠と呼ぶ生徒が近づいていった。

「どうします？ この人数」

「とりあえずウタカタ巡りでもさせればいいんじゃないの？」

ウタカタ巡りとはこの辺でよく使う肝試しのことだった。

「皆さん、とりあえず二人か三人くらいになってください」

余った人はこつちへと簡単な説明がなされる。

「何が始まるんだろう」

隣にいる五十鈴に話しかけるが、五十鈴は夜が嫌いなのかうんざりした様子で眺めていた。

そうこうするうちに三十二人いた生徒は二人から三人の組になってこれから肝試しをするという流れになった。

「じゃ、順番は俺が適当に決めるからルートはこつから松。工業跡地を通って裏山の入り口行って帰ってきて。その後、俺が質問することによって貰ったら今日は一先ず帰っていいから」

ラフな格好の男がそういつて教室の電気を切った。

途端にお祭りムードが静まり始めて、いよいよ肝試しのムードとなってくる。

「おい、なんで電気切るんだよ！」

生徒の一人が怒鳴るが、男は意に介した様子もない。

「もう始まつてるから。外に出て順番に並んで」

オカルト研究会に入りたい人間が電気が消えたくらいで騒ぐのも

おかしな話したが、男の言い分はもつともだった。

すぐに第一班がスタートし始める。

時刻は七時二十七分。お盆も過ぎた今時珍しい蒸し蒸しとした空気が外に漂っていた。

「あ、懐中電灯は持たないように」

「えっ？」

戸惑いながらも一班はスタートした。

「五十鈴、なんかごめん。ただの肝試しみたい」

「今度パフェを奢る約束をもらったけど、アイスクリームの追加ね」

夏休みの海日和に汗水流したアルバイト代が飛んでいく。

それもこれも、怪しげなこの男が突然夏休み前に自然科学現象研究会なんかつくるから悪いのだ。

俺は一人その影を睨み付けて順番を待った。

しかし、時刻は五分過ぎたあたりで第二班にスタートの指示を出す。

いくらなんでも早すぎる。

そう言おうとした時、男が声を上げた。

「こんな感じでいくから。とりあえず」

とりあえずってなんだとりあえずって。

五十鈴は口元を歪めて不敵に笑った。

「どうしたの？」

「いや」

とはいっても一班あたり五分では最後の十班目では一時間近く経過したことになってしまう。

俺は流石にそこまで待つ気はなかったので、五十鈴に問いかけた。

「待つのがあれだったらもう帰ってもいいけど」

「パフェとアイスクリームは貰うと約束したんだからいるよ」

意外とこの割り切った性格が嫌いではなかった。

それでも運悪く自分たちは十班目にいた。

二班、三班と戻ってくる頃になってようやく自分たちの番になったのだった。

「そういえば、質問するって言ってたよな」

「ああ、あれか、別にいいよ。もう帰って」

戻ってきた班とのやりとりはほとんどがこんな感じで終わる。

そうしてようやく自分たちの番が来たかと思った頃、五十鈴が俺の腕を引いた。

「後ろの。先に行つていいよ」

「えっ」

俺はせっかくここまできてと思ったが五十鈴は神妙な顔つきで何かを促すように催促する。

「いいんですか？」

「あ、どうぞ」

たったそれだけのやりとりだったが、後ろにいたのは暗闇だが清楚で綺麗な感じのする女の子一人だった。

「あれ？ 君たち班じゃなかったの？」

男の隣にいたメガネの男子生徒は女の子が出発する時の間合いで感づいたようだ。

「仕方がないな、もうほぼ全員終わっちゃったし」

「私は構いませんよ。元々一人で行きたかったので」

「え、そう？ でもなあ」

男は渋った顔をする。

「なんとか三人で行けない？」

いいですよと言おうとした瞬間、五十鈴から声が上がる。

「イヤです。こんなの」

周りの温度が下がった気がした。

こんなのは明らかに目の前の少女に対して言った暴言に近い。俺は身の竦む思いで今言った五十鈴の言葉を謝ろうとした。

「私も御免ですね」
ますます重い空気が広がる。
男はクシシとおかしな笑い声を上げると行っているよと一言告げた。

「どうして先に行かせたのさ」
俺は最後の十一班目のスタートを切って早々、五十鈴に思ったことを伝える。

「まああ、勘」
「そう……」

五十鈴の勘は凄い。鋭いなんてレベルじゃなくてももう神域にあるような勘を持っている。

今日は事故が起こるとか、誰々が怪我をするだとか、お金を拾うとか。

勘というよりはもはや予言だ。

一度それでロトとかやったらどうなんだろうと話したことがあったが、そんなことをしたら一生追われる身になるからと真面目に話していた。

暗がりの街灯の薄い道を歩いていても五十鈴を異性として意識することはない。

常々思うが、俺は至って正常だ。

ではどうしてこんな肝試しに参加したのか？

五十鈴には話しておかねばなるまい。

「五十鈴」

「んあ？」

「ごめん、精神集中してた？」

「いや、別に」

五十鈴は霊媒体質故に夜は強く自我を意識しなければ己が引きずられてしまうという。

明るい五十鈴なんて見たことも想像もできないが、きっと彼女が

いつも物静かなのはそうだったことが理由ではないかと長年付き合
つてみて思ったことである。

「どうしてこんなことに呼び出したのか詳しく知りたくない？」

「あああ、それは気になるなあ」

小中と何かに共通の話題があるわけでも、深い付き合いがあった
わけでもない二人がここまで長く付き合っているのには理由があっ
た。

五十鈴は見える、そして霊媒体質。

そして俺はそれらを感じて浄化する言霊を扱う人間だからだ。

つまり、俺には五十鈴に憑依してしまった霊を浄化に導く力を持
っている。

通常、霊媒体質者は一度靈魂に取り憑かれると誰かに浄化を施さ
れるまで記憶に障害が起きたり突拍子もない行動に出たりする。

それを凌ぐための保険、それが俺の立ち位置だった。

「あの研究会を立ち上げた山田拓也^{やまだたくや}って奴、転校生らしいんだ」

「うん」

「それで、少し気になって調べて見たら、まあそこでも同好会みた
いなのを立ち上げて色々やってたらしいんだ。夜中の校舎で怪しげ
な写真広げたりして」

「うん」

「そんな時期から徐々に学校が不祥事を出し始めてさ」

地元の新聞では有名な記事になるほど大きな不祥事もあった。

「生徒が死んだって……」

「あああ、それだか」

「え、それでって？」

「やけに人が多い理由」

「ああ……」

金があつて暇を持て余した人間ほど俗世を放れた珍事にめざとい。
それを象徴するかのように夏休み前に発足しただけの研究会よろ
しくオカルト同好会はこんなことになっている。

「でも不思議だよ」

「え？」

「昴はどうやってその情報を得たの？」

「友達同士の間じゃ普通にこれくらいの情報は流れるよ。そうでなくとも学年も中途半端な二年の転校生じゃみんな興味わくしさ」

「ふうん」

五十鈴は今時珍しく携帯もろくに扱えない少女だった。

というより、人との交流をかなり面倒臭く思っている節の方が強い。

そうこうしているうちに松。工業跡地についた。

「はあ、いかにもって感じの場所だ」

「人が集まる場所こそ霊の集まる場所なりって？」

五十鈴はきょんとして工場を眺めていた。

「そうだな、そういうことだと俺も思う」

工場や廃墟に霊がいるわけではない。

いつの時代も人間がこれ呼び、人間が勝手な願望と緋い交ぜになって自滅するのだ。

一瞬ちらつと白い光が影の端で光る。

「行こう」

戻ってくるのが遅い班の一つや二つはあの中で肝試しをしているのだろう。

裏山はすぐ近くだし、真っ直ぐ行ってしまうばそれほど時間はかからない道のりだからだ。

「うん」

しばらく歩いて五十鈴は不意に話を戻した。

「それで、私を呼んだ理由は？」

「ああ、あの人の研究会に入ろうと思って」

「まああ、当然そうなるよね」

一応確認したただけだよと言うが、俺は五十鈴が断れば学校がどうなってしまうおうとも諦めるつもりでいた。

どうしてだか、断られなかったことが俺には嬉しく感じる。

仏像。

突如裏山の入り口、不自然な位置にそいつがいた。

「最悪だな」

「うん」

どう考えてもそこには本来あるべきはずの年代がなかった。

仏像自体はかなりの年数が経っているのに下の土はそれを感じさせない。

つまり——、「どこから持ってきたんだ……」

こういうことをする人間は霊や死をなんとも思っていない人間か、あるいはただの痴れ者だ。

あまりの考えなさに呆れを通り越して怒りさえ感じる。

地脈を磁場の通った石仏で安定させることだってあるのにこれでは作った本人も浮かばれまい。

「帰ろうか」

そう踵を返した時、不意に五十鈴が頭を抑え始める。

「うう……」

強力な霊障を受けていた。

「ごめん、すぐ離れよう」

こんなことは言ってしまうえば日常茶飯事だった。

霊媒体質は何も霊だけに取り憑かれるわけではなく、人々の想念かたまりの塊や想いの強い生身の人間にすら不快感と共に責め苦を与えられる。

五十鈴を背中に担いで来た道を急いで折り返す。

暗がりの中、何度も脚を縛れさせそうになりながらも走った。

無事に松。工場跡地まで戻ると五十鈴は降りると言って歩き出した。

「あんなものがあるなんて、やっぱりあの研究会に入るのはやめようか？」

「ううん」

まだ頭を振って体内の気を安定させている。

こんな難儀がこの先あの男、山田拓也の研究会に入ったばかりに
そう何度も続くようでは身が持たない。

俺は半ば落ち着かない学園生活になろうとも、五十鈴さえ無事な
らば手を出すべきではないと考え始めていた。

しかし結局、五十鈴から答えを聞き出す前に学園へ戻って来てし
まっていた。

「おー、良く戻って来た。お前たちで最後だよ」

「お疲れ」

メガネの男がなにやら缶ジュースを差し出した。

「え、なにこれ。今まで誰にもあげてなかったはずじゃないか」

「ああ、何て言うかお前たちは合格だからさ。祝いに一杯やろうか
と思つて」

「え？ 俺たちだけ？ でも俺たちは……」

五十鈴に目配せすると彼女は伏した顔を上げて言った。

「……入るよ」

「んじゃ、決まりつてことで」

「あ、俺岡部大輝です」

「俺も一応名乗つとく？」

「山田拓也先輩ですよね」

「ああ、でも山田も拓也も使用禁止だから」

「はあ」

この男は少し異常な気配が漂っていた。

それを師匠と呼ぶ同学年の岡部。

五十鈴が石畳の地面を半歩詰めると問いかけた。

「あの石仏を動かしたのはお前か？」

それは地鳴りのようにも聞こえたし、女のような声にも聞こえた。

「俺だよ」

男は即答していた。

「え？ 師匠？」

五十鈴は黙ったまま動かない。

「戻しておけよ」

「やだよ」

俺は咄嗟に五十鈴に九字を切って介文を心読した。

五十鈴はその場に崩れ落ちそうになるのを後ろから抱え込んで支える。

「は、ははは。じゃ、俺ら帰りますんで」

全身から冷水が滲み出ているようだった。

俺は呆然としている一人とにやりと笑みを浮かべる一人を尻目に学園を後にした。

「あの女、本当に生きてるのか？」

そんな男の声が背後から聞こえた——気がした。

ゝ
々
々
(後書き)

実在する人物、団体とは一切関係がありません。

く式く

無機質な床に覆われた質素な部屋で四人は顔を合わせていた。暗がりに光る四つのライトはそれぞれ中央の床を照らし静止している。

『南無久遠実成本師釈迦牟尼仏——』

延々と連ねられた経文はこの冷たい空気を一層と冷え込ませる。「アタリだな」

男はそう言つて不適當な笑みを浮かべていた。

——およそ五時間前。

俺たちの学園は目下9月1日まで休みが続いている。もちろん既に終わりつつある夏休みだが、今朝になって突然見知らぬアドレスからメールが届いた。

件名：自然科学現象研究会より。

メールアドレスは昨日の研究会参加用紙に書いていた気がする……。

内容は着替えを数着持つてA-2教室へ来いというものだった。

ああ——とへなちょこな声を上げてしまう。

昨日の一件が遠い日のことのように感じる。

あれから五十鈴はすぐに持ち直したが、普段ならそう簡単に憑依はされないはずなのにあの日は何かがおかしかった。

今となつては調べようもない。

俺はメールを五十鈴に転送して身支度を終える。

雑木林に囲まれたこの街は三傘市と呼ばれている。

三角錐の山が三つで三傘らしいが、本当か嘘なのか知人に知る者はいない。

駅前で五十鈴を待つ。

家までいつでも良かったのだが、五十鈴の家庭事情は少し複雑で俺が行くと色々と気を遣わせてしまうので遠慮している。

当然だ。

あの家はエクソシストなんていうものまで本気で呼んだくらいなのだ。

「そう言えばこの間、世界最後のエクソシストが死んだってネットで見たな……」

悪魔払い。果たして日本にも悪魔はいるのだろうか。

はっと辺りを見渡すと五十鈴がこちらを歩いてきていた。

何とも言い難い複雑な心持ちになる。

至って普通の少女の格好だが、些か色気がない。

ジーパンに半袖のポロシャツ。

これじゃあ昨日の誰かみたいだ。

「待った？」

「待ったよ」

「うん」

何がうんなのかわからないが、とにかく電車には乗り遅れない時間だった。

改札口を通ってホームに並ぶ。

「そういえば、この間電車で轢かれた人、私のところに来たよ」

「え？ あれって九州の方じゃなかった？」

「うん」

「遠いところからくるなあ……」

「距離って関係ないみたい」

それきり話題は途絶えた。

電車が来てから想像してしまったのだ。

「おい」

突然五十鈴がおいと言うのには未だに馴れないが、座った座席を移動しろと言いだした。

「まあ、いいけど」

「あそこはそのうち変なのが来るからね」

そうだ、考えてみれば入学当初もそんなことがあった。

やがてそれは現実のものとなって今まで座っていた俺の席にふてぶてしくどかつと座る柄の悪い男が座る。

「今のも勘？」

「記憶の方」

「あ、そう」

思えば、絡まれたのを思い出す。

自分が座れなかったせいか始終俺をにらみ続けた後、降り際に突き飛ばされた。

五十鈴は俺が突き飛ばされるところを見ていたのかもしれない。

『次は、東三傘——』

下車する駅で男をちらりと見るが男の方は俺の顔など覚えてもいないようだった。

交差点をいくつか渡った後に一角だけ神妙な建物がある。

絢爛な学園と言いが、それなりの高級施設でいつ見ても学舎のように見えない。

そんな昇降口をくぐり、A - 2教室に着いた。

「写真の信憑性ももうほとんどないな」

そう言いながら一枚の写真を男は投げる。

「うわ、なんすかこれ師匠」

「心霊写真」

五十鈴は俺から静かに離れた。

どこか見知らぬ旅館でツーショットを取っている背後に水色が緑かわからないような顔が薄く見える。

「合成だよ」

その一言で空気は一気に軽くなる。

「今のご時世、心霊はもはや創造物って感じた」

そんなに居て貰っても困るのだが。

俺は五十鈴を見ながら思った。

「とにかく、その旅館もうないから確かめようもない。昨日行ってきたけどもぬけの空だった」

「え、行ってきたんですか」

「そりゃいくよ、ここから近いし。こっそり中の写真も撮ってきたけど見る？」

そう言って師匠と呼ばれた男（山田拓也）はバッグの中から数枚の写真を取り出した。

正直言ってなんの面白みもないただの廃材が映った写真だった。

そんな中、五十鈴一人が一枚の写真を手に取る。

「どうした？」

「いや、何も……」

何もといったところでこの男たちの好奇心には歯止めが利かない。それはすぐに発見された。

「おい、ここに何か映ってないか？」

フラッシュの光りがリノリウムの床を白くしているが、その中に黒く文字のようなものが影を落としている。

「汚れ……には見えませんね」

文字の羅列だった。

遠くて判別できないが、長々と何かが写真の端まで続いているようだった。

「くそ、どうして気がつかなかったんだ」

リュックを背負って男は行くぞと声を上げる。

「え？ 行くなってまさか……」

「ここの写真の場所だよ」

「ええっ！ そのための着替えだったんですか」

「本当は裏山の夜通しパワーサークル探索だったんだけど、そっちの方がいいか？」

「いえ、こつちでいいです……」

閑話休題

小学生低学年の初めて五十鈴と会ってから丁度二年したあたりだった。

クラスではその頃、絶対に掛けてはいけない電話番号というのが流行っていて何故か携帯の番号だったのを覚えている。

掛けると死ぬだとか、呪われるだとかああいっどこにでもある類のものだったと記憶している。

×××74123なんちゃらがそれだった。（確か最後は852？）

当時まだ五十鈴のおかしな言動を知識が沢山あるのを冷やかされないために演技しているだけなのだと思っていた俺。

そういう遊びなのだと思っていた俺は割と深く考えずに図書館なんかにある公衆電話で試そうということになった。

その頃友達の人だったK（男子）は特に乗り気だったが、五十鈴は絶対やらないと言ってどこかに行ってた。

俺はまだかなりのガキで、大人っぽい五十鈴がやらないのに二人だけでやるのがかなり興ざめだった。

半ば仕方なく付き合っただけでやることにしたのだが、思えばKが消えたのは俺のせいかもしれないと今でも時々思うことがある。

結果的にいうと公衆電話からかけたその番号は現在使われていないという呆気ないものだった。（今は試したことがない）

しかし、それから一ヶ月くらい経った頃になって親父のパソコンのキーボードのテンキー（右側の数字）を見ていてあることに気がついた。

74123がなんとなくひらがなの「し」を象っているように思っただけである。

電話は上から123と並んでいるのでこのことには気がつかなかったが、こうなると852にもなにか意味があるのではないかと思

ってしまっ。

今思うと俺はこのことをまずKに言っってしまったのが間違いだっ。

すると、（今でもはつきり覚えているのだが）Kはすごく喜んだ顔で「そうか、それだったんだ！」となにかが符合したように笑った。

それからしばらくして、Kはだんだんクラスの日陰者になっていった。

後から知った話したが、影でいろいろいじめてるやつとかいたらしい。

俺はその間、ずっと学校が終わったらずぐ家に帰る生活を送っていて、Kのことも電話のことあまり眼中になかった。

というのも、その頃丁度五十鈴が体調を崩し始めていて、五十鈴の両親が海外にいくとかいうのが重なり、親戚がいなかった五十鈴は俺の家で養成していたからだ。（当時なかなか進まなかったドラクエとか手伝ってもらってた（w）

五十鈴と俺のうちの関係はまた今度書く。

何があつたのか、Kはそれから転校することになるのだが、最後にKが話しかけてきたことがあつた。

「あの電話、やばいよ。俺、二人もヤツちゃった」

聞くところによれば、Kが言うには852の『続き』を発見したというのである。

どういう手順を踏んだのかわからないが、俺は咄嗟にKをやばいと思っ。

確か電話の逸話は掛けた本人が呪われるっていうものだった。

なのに、K自身はやったと（その時は何のことを言ってるのかわからなかったが）はつきり告白した。

もうだいたい昔の話になるので、あんまり記憶も定かではないが、

その当時転校がやたら多くてKもいれると学年の終わりには4人くらいは転校していた。

電話の詳しい内容も気にならず、Kとはそれっきり最後まで話すこともなかった。

それから小学六年生になった頃、修学旅行先の公衆電話を見て五十鈴が不意に「そういえば、呪いの電話ってあったよね」と話題を振ってきたので俺は咄嗟にKのことを思い出した。

「あいつ元気でやってるのかなあ」

と俺が言つと、五十鈴ははつきりと「死んだよ」と答えた。

それは割と衝撃的で背筋を冷たいものが走り抜けたかと思うと、まるで目の前にいるのがKの亡霊にも見えるくらいの凄みで、

「どうして先に私に「し」のこと言わなかったの？」

と責め始めたのだ。

どうして五十鈴がそのことを知ってるのか俺は酷く驚いたのを今でも覚えてる。

そして、五十鈴が絶対にやらないと言った理由は掛けた者の末路を知っていたからかもしれないと思った。

く式ノ上

駅につくと突然岡部が全員分の切符を払うと言い出した。

「ああ、僕F病院の院長の子供なんで」

「そうか、悪いな」

男、山田拓也は悪びれもなく岡部の切符を受け取る。

「はい、石妙君と三雲さんの分も」

隣町とはいえ、三人分を負担すれば三千円ほどになる。

俺はそんなものを率先して払おうとした岡部に意図を尋ねた。

「おかしいかな？ まあ、強いて言うなら師匠の機嫌が悪そうだったから」

師匠。なぜそう呼ばれているのか、俺には不思議だった。

山田という男はどこか変わった雰囲気で、息を殺したような濁った目をしている。

「師匠と呼ぶ理由ですか？ いずれ分かります」

思わせぶりな口調で岡部はその陽気な笑みを列車の窓へと流した。

「昂」

うとうととしてきたところに鈴の音が響く。

五十鈴のどこか浮世離れたつめたい瞳が俺を見つめていた。

「あ、なに」

不快感はない。

あのつめたい瞳は俺にとっては安らぎに近い感情さえ持たせる。

「もう着いたって、早く降りよう」

気づけば岡部も師匠と呼ばれる山田もいない。

慌てて乗降口から下車すると、何やら山田は取り乱していた。

「まずい」

「なにがですか？」

「この時間だと着くのが夜になる」

え？ と一同の顔が翳^{かげ}った。

「まあ、大したことは起こらないと思うけど……」

大したことって何だ、それは。

山田は意に介した様子もなく、ずかずかと改札口へ消える。

俺たちもその背中を追うが、岡部が不意にこんなことを言った。

「師匠が起こらないと言って起こらなかったことってあんまりない」

バスに乗り継いで二十分余り、着いた辺境は何処知れぬ殺風景な田舎の真ん中だった。

「こんなところに旅館が？」

民家というか、小さな農家のような場所がぼつぽつとあるだけの何とも心許ない場所。

電車とバスに乗るだけでこんなところに来られることが信じられない。

「もう日が沈むな……」

ふと山田が空を見上げて言った。

太陽は黄金の鋭い日射しを輝かせながら静かに山の背中へまわっていく。

宿は取っていないし正直、普通じゃないと思う。

俺たちはそこから徒歩で十分ほど歩いたところで、考えられない一角を目の当たりにした。

『立ち入——禁止』

真つ二つに折られたフェンスが訪問者を拒絶している。

辺りはすっかりと薄暗くなり、空はもう濁った水色になっていた。その真下に立つ一見安穩と荒廃した旅館。

「はいこれ」

手渡される懐中電灯。

正直勘弁してくれと言いたところだが、五十鈴の表情は変わらないもので自分だけが取り残された気分だった。

がしゃん、ぱきりとガラスを踏みながら踏み入ると案外広い建物なのが伺えた。

酒瓶もそのままのカウンター、ひっくり返ったテーブルや横たわった椅子などはまだ使えそうなものに見える。

「師匠、どうせだからちゃんとこの噂を聞かせてくださいよ。何があつたのか」

また岡部はどうしようもないことを言う。

そんなのを聞いてしまえば、これからの行動に必然気の迷いが生じるだろう。

しかし、俺は好奇心からその言動を諫めることはしなかった。

「端的に言つと、宿泊客は全員怪死するって噂の宿だった」

怪死という聞き慣れないフレーズに意味を考える。

怪死といえば、原因不明の死ではないだろうか。

「でもそれは、もっぱら自作自演っていうか、ただ凄惨な死を遂げた客がいたからそれにかこつけて知名度を上げようとしたってものだった」

「最悪じゃないですか」

「まあな」

しかし、話しはこれで終わりではなかった。

それでもわずかに収益が上がったことに味をしめたオーナーは宿泊客に記念写真を撮らせ、それを自分で加工しネットに流出したのだという。

いつしか旅館は噂の『出る旅館』として収益を上げていったところだ――、

「ある時からぱったりと客足が途絶えたらしいんだ」

「へえ、マスコミに上げられたとか？」

「いや……客は来るには来るんだけど、どうも泊まらずに帰って行

つてしまつらしい。オーナーは中から呼び込むんだけど、客はみんな入る気がしないと言つてな」

「それで？」

珍しく五十鈴の口が開いた。

「オーナーは死んだ」

静かな静寂と部屋を流れる冷たい空気が俺たちを包む。

「死んだつて……それじゃ何の解決にもなつてないじゃないですか」
「そこなんだ」

山田は写真を広げて見せた。

五十鈴が何か書かれた文字を見つけた写真だ。

「死の直前にこのオーナーは坊主を連れてきたらしい。お払いでもして客に安心をさせようつていう画策だったのかもしれない」
しかし、それは失敗した。

それがオーナーの死であることは容易に理解できた。

「ここだな」

廊下の一面に刻まれた文字。

それは経文に他ならなかった。

『南無久遠実成本師釈迦牟尼仏——』

今も尚、色あせないそれはライトの光にぼんやりと呼応している。
心音のように低い声で山田は静かに言った。

「——アタリだな」

く式ノ下く

『南無靈山会上来集ノ分身諸仏——南無諸大菩薩——五番ノ前神
諸天等 特二八鬼子母大善神 惣ジテ八仏眼所明ノ一切三宝来臨影
蒿 妙法経力 速得自在——』

訳の分らない文が永遠と続いていく、その先。

一つの仏像がひっそりと居座っていた。

「ここまで嚴重に経文を書き連ねてなお、オーナーの変死か……」

「変死？ どんな死に方だったんだ？」

その時、蝶番の外れていた扉が大きな音を立てて暗闇に沈んだ。

「お、おい……」

岡部が動揺したように振り返るが、そこにはただぼうつと映し出される扉のシルエツトがあるだけだ。

五十鈴も頭痛は起こさない。

つまり、霊ではないということだろうか……？

「そうか、なるほどな……」

山田は経文を見ながら一点を指さす。

「怨敵退散と書いてある」

一同がその指先を見る。

「お、本当だ」

怨敵、つまりそれは生きている者を指す場合が多い。

相手が死者ならばここは怨霊退散となるはずだからだ。

「じゃあこの経文は……」

「生き霊返し——」

五十鈴の声にゾクリとした感触が背筋を駆け上がる。

生き霊とは生きた人間が霊となって彷徨う姿を指す。

具体的には自分の思った不幸が知らぬ間に起きたり、憎い相手か
思った災難に見舞われたりする。

そこにあるのは潜在意識の邪なる動きであり、生き霊がもたらすものはほぼ悪しきことである場合が多い。

「ちよつと待てよ、そしたら今この空間っていうのは——ッ」

パシンパシンとまるで拍手をするかのように部屋中に奇怪な音が鳴り響き始める。

まるで部屋が冷蔵庫にでもなったか、全身が身震いしてしまうほど寒い。

「五十鈴——」

俺が五十鈴に注意を呼びかけるよりも早く、山田が動いていた。

「臨兵闘者皆陣裂在前」

よほど結び慣れているのか、もの凄い速さで印を切る山田。怪奇現象がピタリと止まる。

「……やべ……」

しかし、山田から漏れたのは意外な一言だった。

「どうした？ 成功じゃないのか」

わずかな風を感じる。

生ぬるいお湯に浸かったような言いようのない不快感が肌をぬぐっていく。

先ほど壊れたはずの扉が急に起き上がり、部屋の出入り口にけたたましい音を立ててはまる。

「岡部……見てきてくれ」

「え？ 俺っすか？」

恐る恐る近づくも扉は微動だにしない。

岡部はノブを回すが、当然びくともしなかった。

その時、山田の方からバキッと甲高い音がした。

「やめた方がいい」

五十鈴の言葉がわからないが、それはすぐにわかった。

電灯に映し出された山田は脂汗を額に垂らしながら必死に両手に掛かる謎の力に抗っていた。

両手は印を結んだままで、それを何か為体の知れない力が引つ張っているようだった。

「人を殺すほどの念だとすれば、それを抑えるだけでも並大抵じゃない。すぐにやめるべきだ」

五十鈴のはつきりとした抑止の声。

だが、どうしろというのだろう。

やめれば次にどんな攻撃がくるのかわからない。

状況を見てから後手にまわっていては命がいくつあっても足りない。

師匠こと山田の行動はまさに先手必勝、絶対的に低リスクな判断だったといえる。

「この力を借りよう」

生き霊返しの経文を指して五十鈴が座り込む。

中心の菩薩に何やら一字を加えて印を切る。

「（オン、シュチリ、キャラロハ、ウンケンソワカ）」

それはまさかの呪詛返しだった。

しかし、地盤にあるのは生き霊返し。

「山田、解け」

五十鈴の一言で、山田の印が解かれる。

その時、確かに見えた。

山田の首に手を回す、長髪の女。

眼窩の中に狂気を宿したそれは狙いを五十鈴に定めたのか、信じられない速度で迫る。

「五十鈴——！」

反応するかそんなレベルではない。

俺が声を上げた時には既に女と五十鈴の距離はゼロだった。

「オ。アアアア——」

女は急に悲痛に叫びだした。

座った五十鈴の首が女の両腕に掴まれる。

「まずい——」

しかし、九字を切ってここから間に合うはずもない。

霊の後手にまわるといふことはこういうことなのだと後悔する。

次の瞬間一気に五十鈴の首が反転した。

空間から音を抜き取ったようにスローモーションで映像が流れる。

女はそれと同時にかき消えた。

「おい、五十鈴……」

「なに？」

えっ、と一同が声の方を見る。

五十鈴はずっと俺の後ろにいたらしい。

じゃあさっき見ていたのは——、

そこには菩薩の彫像が転がっていた。

もちろん、首は取れていたが……。

頭の後ろに一文字「此」というような字が書かれていた。

「信じられん……追っ払ったのか？」

山田の指はおかしな方向に曲がっているようだった。

「結局、ガチだったんじゃないですかあ」

尻餅についてうなだれる岡部。

「今のうちに早く出よう」

いつの間にか明るくなりつつある空。

岡部と山田が消えていく中で、五十鈴の腕が俺の腕を掴んでいた。

「どうしたんだ？」

「？」

五十鈴はまるでそれに気づいていないとでもいう風に見つめる。

「ごめん」

俺は歩き出した。

五十鈴の気配はずっと背中にある。

「おい、見ろよ。日の出だぞ」

「嘘だろ、さっきまで夕方だったはずだ」

見たことのない陽の光が俺たちを照らす。

8月の終わりだった。

閑話休題 2

五十鈴の家に初めて上がったのは中学に上がつてからだった。

その頃、学校内で流行っていたこつくりさんがぱたりと行われなくなったのと同時期、五十鈴は学校を休む毎日が続いていた。

「この家は君の家だと思っていいからね」

どういう因果か、五十鈴にプリントを届けにきた折りに両親が出迎えてくれ、そのまま泊まっていかないかと言われた。

この時はまだ、その真意に気づくこともなく、俺は丁重にもてなされた。

もちろん、食卓の場に五十鈴はいない。

なんだか他人の大人にもてなされるおかしい構図が酷く不気味で、俺は料理にもあまり手つかずのまま五十鈴の状態を尋ねた。

「ずっと寝込んだまま、しばらくしたら入院させようと思っている」

五十鈴が寝込む理由は一つしかない。

風邪などという陳腐な原因ではなく、俺の頭に浮かんだのは憑依の二文字だった。

五十鈴の話題に踏み切るとどうにも歯切れが悪いこの両親はどこがおかしい。

俺は帰ると告げて家を出ようとしたのだが、両親はこんなことを言い出した。

「今日は五十鈴のそばにいてやってくれないかな」

仮にも五十鈴と俺は男女の仲で、友達のよしみでしかない。

それなのにこの両親の言うことなす事はまるで俺をここにとどめようとしているかのようだ。

「どうしてそんなことを言うんですか……？」

曲がりなりにもそういうことに何か言いしれぬ危機感を感じた俺はその訳を尋ねてしまった。

「頼む……この通りだ」

土下座。およそ俺が見る最初の土下座である。

「……………」

五十鈴の部屋に通された俺はあまりの異質な空間に身じろぎどころか、心臓まで凍り付く思いだった。

ベッドの上で座っている五十鈴は一糸纏わぬ姿。もはや、生きている人間とは思えぬほど痩せこけて、白い肌を一層白くしていた。長い髪はぼさぼさに顔を隠して、だらりと下げられた両腕がこちらを向いている。

これがお化けだと言われれば、そうですかと言いたくなるような異形だった。

後ろの扉からは母親が父親のした俺への待遇に口論していた。

「あんな——に会わせる——て」

「し——ないだろう！——は、——を連れてこ——るんだから」

「あの子は——の——ない——のよ」

「……………」

その声は徐々に遠ざかって行き、俺はもうあの両親の会話を聞く気にはなれなかった。

つまりは、俺がここで五十鈴におかしくされるか、俺がここで五十鈴を治すか。

二つに一つだと、何かがそう告げた。

「い、五十鈴。俺だ、分かるか？」

「……………」

分かるはずがない。

「源さんは？ いないのか？ おーい、源さん！」

源さんとは、五十鈴についている守護霊のようなものだ。

五十鈴自身が自分の精神で拒めなくなるほどの憑依が行われる瞬間に強靱な守護霊に先に憑依してもらおう。

それが五十鈴の続けてきた十数年の護身術だった。

「う……う、すばる……」

「源さんか？ 五十鈴か？」

不用意には近づくな。

それは五十鈴がいつも言っていたことだ。

「い、いすず……」

くぐもった押しつぶされたような声で五十鈴が喋った。

「何でだ、源さんがいれば憑依なんてへっちゃらのはずだったろ！」

「足りない……霊格が……」

馬鹿なと思った。

源さんの霊格は上から五番目くらいに高かったはずだった。

学校で流行っていた降霊術を思い出す。

生徒がしきりに行われたこっくりさんがよもや神格に拮抗するレベルの悪霊を呼び込んだということだろうか。

「ど、どうしろっていうんだよ。無理だよ、そんな——」

キィイと目眩がするほどの耳鳴りが始まる。

五十鈴の背中に見えるどす黒い人影。

いや、人の影ではなく無数の首だった。

五十鈴はもう意識が飛んだのか、耳から流した血を頬に伝わせ、口からだらしなく唾液を流して弓なりに痙攣している。

「これだけの霊を憑依させるなんて……」

霊の憑依数はその者の霊力に依存する。

霊媒体質とはいえ、一度に数百数千という霊を憑依させるとすれば、それはもう神格に近い。

五十鈴はまさに学校で無闇に降霊される全ての下級霊の憑依先と化していたに違いない。

この街で五十鈴以上に憑依しやすい人物はいなかったということだ。

そして、ダムが決壊するように憑依された五十鈴はこの霊の波に到底抵抗できない。

憑依された人間がその憑依を払えなければ、待っているのは魂の不浄。

「ゴポ……ポ」

人間の持つ魂は大きく分けると二つで、一つは意識体。もう一つは心体という部位だ。

意識体（自我）は魂を覆う膜のようなもので、死ねば消える。

しかし、心体は一つの人格のようなもの。

その本質が犯されるということは本質の死を意味する。

転生もなければ二度と、五十鈴のような人間が現れることもない。

目の前で唐突に起こる死に対して俺は迷っていた。

怖いのだ。魂がその闇の怖さを知っている。

究極の死がそこにある。

その時、突如開け放たれた扉から十字架を握った男が乱入してきた。

ヒツという声と何か水やら塩やらを撒き出す男。

『だめだよ、そんなんじゃない』

「え？」

後ろを振り向くが、五十鈴の両親の絶句した姿以外に影はない。

『君が助けてあげないと、あの子は死んじゃうよ。それでもいいの？』

どこか懐かしい声が俺の中に響き渡った。

「だめだ」

反射的にそう答える。

『じゃあ、今から教えるこれを覚えて』

頭の中に自然と浮かぶイメージは綺麗な着物を着た少女のものだった。

どこかで忘れた懐かしい記憶だ。

『怖畏軍陣中衆怨悉退散』

素人からでも感じるその圧倒的な破滅の念。

俺は慎重にその念を五十鈴の背後に向かって解き放つ。

『怖、畏、軍、陣、中、衆、怨、悉、退、散』

『怖、畏、軍、陣、中、衆、怨、悉、退、散』

既に傍らで伏す謎の男を尻目に俺は五十鈴の背後に蔓延る黒い影を破壊の念で切った。

そこから一切の記憶はない。

く参る

学園が始まってしばらくは例の研究会も活動らしい活動はなかった。

それでも入部の希望者は後を絶たない。

俗世に疲れた者、日常に刺激を求めるものがこぞって参加しようとする。

それを断るのは二年の転校生である山田拓也。

そんな彼に痺れを切らしたのか、非公式にそういった超常現象を調査する生徒が現れ始めた。

廊下の一角にはそんな有志を募るポスターがあった。

「五十鈴、どうかした？」

「……別に」

あの一件以来、五十鈴の声色は妙に沈んでいる。

この異常といえる非日常への埋没は果たして人間の性なのか俺には分らない。

そしてそう云った凡百夫人のアニミズムへの渴望は五十鈴の霊媒体質にとっても毒になり得た。

9月に入ってから連日で山田（先輩）が職員室へ呼び出されるので、俺と五十鈴、岡部の三人は別段することもなく部室でネットサーフィンやら県内の事件を調べている。

「そういえば、この部室は正規に認められているのか？」

名目上は化学室で、自然現象研究会のような名前だったはずだ。

「もちろんっすよ、その辺は部長が上手くやってくれますんで」
不安といえば不安だ。

ここのところやっていることといえば、五十鈴はただ窓の外を眺めているだけだし、俺は山田の所有する心靈写真を眺めているだけ。こと岡部に至ってはまるでネット中毒のようだった。

これで研究会の活動のはずがなかった！

「失礼します」

現れたのはいつぞやに見た女子。

「ああ、草葉さん、久しぶり」

草葉と呼ばれた少女は岡部とまるで見知った顔のようだった。

「えっと？」

俺がその記憶をたぐり寄せているうちに岡部はその女生徒を紹介した。

「草葉^{くさば}怜歌^{れいか}さん、この間の試験のときに石妙君の後ろにいた人だよ。嗚呼と納得する。

この女は五十鈴が嫌っていた人物ではなかっただろうか。

「その節はどうも」

五十鈴に負けず劣らずの美少女だが、どうも俺には敵意に先立つ口調で会釈する。

「ということは草葉さんもこの研究会に？」

「一応、師匠から許しは出てるんだけど……草葉さん？」

「ええ、私も今日はそのことで伺いに参りました」

なんというか、仕草に如才ない人でどこか育ちの良い物腰が滲み出ている。

「端的に言いますと、これから行動するときには私を筆頭にして頂きたいのです」

突然紡がれた暴論に岡部は目を丸くする。

それはつまり、自分を部長にしろという言い分だった。

「と、とりあえず山田先輩が帰ってきてからじゃないと……」

珍しく岡部も山田と苗字を使う。

「そう？　じゃあここで待つわ」

しかし、その視線が窓辺へ向けられたと同時に草葉の眉はつり上がった。

通り過ぎるその横風からひやりとした芳香が漂う。

「あなた、かなり不浄になってますよ」

突然話しかけられた五十鈴はゆっくりと億劫そうに振り返る。

「不浄ってなに、月経のこと？」

草葉の顔がさつと変わった。

「あなた……！」

事を五十鈴も思い出したのか、眉が微妙に動いた。

――がらがら。

スライドした扉から現れた研究会部長、山田は草葉を見るなり笑みを浮かべた。

「あら、山田先輩」

「俺をその名前で呼ぶな！」

恫喝にも似たその叫びは静寂を生んだ。

ちつというような舌打ちが聞こえた。

「師匠、草葉さんがどうも指揮を執りたいようです」

岡部が場を繋ぐが、草葉の眉は以前としてつり上がったままだった。

「別にいいよ」

緊迫した雰囲気からは一点間の抜けたような返答がされる。

「そう、ですか」

草葉も何か納得がいかないのか、歯切れが悪い。

「それより、今週の土日は空けておけよ」

「えっ」という声上がる。

この間はあるなところに連れて行ったくせに山田の声は真っ直ぐだった。

「霊能者、会いに行くから」

どうしてそんな流れになったのかはわからないが、その週の土日はとにかく朝から五十鈴のメールが絶えなかった。

メール内容は一括して「行きたくない」というような旨だったと思う。

五十鈴は嫌いなのだ。

そういった霊や憑き物を払うことを生業にした人間が……。

俺はなんとかして五十鈴を連れ出そうと躍起になっていた。

俺は自分に憑いてるものを知りたいからだ。

身支度を早めに済ませて、五十鈴の家に直行する。

最もその頃には様子を見てから判断しようという気持ちに変わっていたが。

「五十鈴」

相変わらず人気のない家に玄関から声を掛ける。

返事はない。

「上がるぞー」

鍵が掛かっていないのはどういうわけだっただろうか。

不用心といえば、不用心なのだがこの家に丸裸で入ることはさらなる不用心だと言わざるを得ない。

一つ、二つ――。

リビングを素通りして、五十鈴のいる二階へ上がる。

三つ、四つ――、五つ。

俺はこうして右足を動かすごとに数を数えながら家の中を歩かねばならない。

何故ならこの家はもうすでに一つの生き物のように憑かれすぎているからだ。

五十鈴が特異な霊媒体質のためにこの家はそういったモノに触れ

すぎた。

いつからか、五十鈴の家は五十鈴以外が入るとその者に霊媒体質を与えるような家となった。

つまりはこうして数を数えて己を強く持たなければ、容易に自らも霊媒状態となってしまうのだ。

下手をすれば、あつという間にこの家にいる下級霊に支^し廃^はされてしまっだろう。

丁度、二十五歩目にして五十鈴の部屋へ着いた。

軽くノックするが、返事はない。

ノブを捻ると抵抗がないまま開いた。

「うわ、冗談だろ……」

五十鈴の部屋はもはや、部屋とは呼べないような有様だ。

鼻をつんとつく臭いは芳香でもコロンでもなく、何か線香を焚いたような感じ。

部屋の四隅には盛り塩が漏られており、天井と床に五芒星が描かれている。

五十鈴はその中央で膝を抱えていた。

ゆっくりと首を上げる五十鈴の目に俺の姿が映るまではまるで、五十鈴がこの世のものではないかのようにだった。

「昂か」

「パジャマのまんまじゃないか」

「……………」

億劫そうに五十鈴は手を伸ばして、貸してくれと言った。

驚くほど軽く五十鈴の体は持ち上がる。

「どうも、今日は気が乗らないよ」

「どうして」

「嫌な予感がする」

「霊能者は偽物とか？」

「昂、霊能者がすることって何だと思う？」

「預言とか除霊とかそういうのだろ」

「うん、それ」

「？」

「だから、あの部長はそれを必要としてる。それが嫌な予感なんだ」

「ああ、なるほど……」

確かにあの奇怪好きの山田が除霊や預言を必要と考えたとすれば、それはこの間のやばい旅館の比ではない。

「俺はそういうのとは別に一度会って見たかったんだよ、霊能者って人に」

「まあ、そう言うなら行こうか」

五十鈴は首を軽く振りながら胸元に手を掛けた。

「ここで着替えるつもりか！」

「私の部屋だけど」

「俺がいるんだから少しは恥ずかしがったら？」

「別に……」

俺はため息をついて外へ出た。

俺自身、何も感じなかったのが一番怖かった。

妹？ 姉？ どれも違うような気がする。

ただ、五十鈴は——そのものなのだ。

だから、五十鈴を好きになる奴はきつと何もかも失う。

俺にはその覚悟が——。

「おい、人の家の前で立たないでくれ。ただでさえ変な目で見られているんだ」

気づけば五十鈴が横を通り過ぎていく。

「待ってくれ」

呼べば止まる五十鈴の横顔はいつも吹けば消えそうなほどに儚いものだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3892n/>

オン≠ヨウ少女

2010年12月6日13時25分発行